

FIAFパリ会議報告

A Report on the 64th FIAF Congress in Paris

創立70周年記念会議の光と影

岡島 尚志

Hisashi Okajima

連載:

フィルム・アーカイブ
の諸問題
第66回

4月21日(月)から26日(土)までの6日間、国際フィルム・アーカイブ連盟(FIAF)の年次会議がパリで開催された。ここでは、FIAF創立70周年記念とも銘打たれた今回の会議について、その概要を報告する。

今回行われた第64回FIAF会議の特長は、一にかかってそれがFIAF創立70周年を記念してパリで開催されたという点である。FIAFは、1938年6月17日、この都市にアイリス・パリ、アンリ・ラングロワ、フランク・ヘンゼルら数名が集まって会合を開いたところから始まっている。4都市4会員による小さな親睦団体として始まったFIAFは、70年を経た現在、70近い国から130以上の加盟機関を擁するにいたっており、その始まりに関わったフランスとパリは、威信にかけて今回の会議を成功させたといっている。

主催は、国立映画センター／映画アーカイブ部門(ボリス・トドロヴィッチ所長、以下、CNCフィルム・アーカイブ)だが、特筆すべきは、シネマテーク・ドゥ・トゥールーズをはじめ、フランス国内にある他のすべてのFIAF加盟機関が正会員・準会員を問わず、開催協力に名を連ねたことである。メイン会場となったのは、パリ市東南(12区)ベルシーに移って2年半が経ったシネマテーク・フランセーズ(セルジュ・トゥビアナ館長、以下、CF)で、とりわけシンポジウムや年次総会、特別上映などには、NFCでいえば大ホールにあたるサル・アンリ・ラングロワが提供された。また、CFの川向こう(左岸)にあるミッテラン国立図書館(BNF)も一部の上映会²などで使用された。

昨年の第63回東京会議は、出席者が国外160名、国内50名を越え、史上最大規模とな

ったが、今回のパリ会議は、70周年記念であることや欧州会員にとってパリが近隣であることもあり、一説には400名以上の参加者を数えるという圧倒的な記録更新の一大国際会議イベントとなった。

1. シンポジウム——「パンドラの箱：フィルム・アーカイブと権利問題」

FIAF年次会議は、いつも一つか二つの重要なテーマ(緊急性のあるもの、あるいは積年の懸案となっているもの)を設定してFIAF内外の専門家によるシンポジウムを開催しているが、今回は、プログラミング&アクセス・コミッション(PACC)が主導して2006年サンパウロ会議、2007年東京会議と、議論を深めてきた「フェアユースとアクセスに関するFIAF宣言」(以下、FIAFフェアユース／アクセス宣言)の採択に向けて、2日間の研究発表、公開討論を行った。

世界の著作権問題の専門家、弁護士、映画製作者、フィルム・アーカイブの上映担当者やフッテージ利用担当者らが、それぞれの立場から発言したこの会合は、映画・映像と著作権をめぐる諸問題を(その歴史も含めて)説明するものから、さまざまなケーススタディを扱うもの(例えば、『メトロポリス』の非フィルム資料の使用に関するきわめて複雑な権利問題)、デジタル時代の新たな著作権問題をブリーフィングするもの、「パブリック・ドメイン」「オーファン・フィルム」「パイラシー(違法な複製や販売を行う「海賊」行為)問題」「法定納本制度の映画への適用」「保存／復元とアーカイブの権利」「フェアユース」など、フィルム・アーカイブが日々直面している権利に関するあらゆる問題を徹底的に議論しようというものである。

「一部のフィルム・アーカイブは歴史的に違法な上映やアクセス許可を行ってきた」「彼らは今後も違法行為を繰り返す可能性があるのではないか」といった著作権者、映画製作者側の思いと、「フィルム・アーカイブこそが、作り手が見向きもしなかった映画を集め、保存し、評価してきた」「フィルム・アーカイブは公的な資金で運営されているのだから、それによって安全保護された映像の使用について自由度を高めるのは、納税者や資金提供者の期待に沿う公的なサービスの一環である」「シネマテーク上映が、興行力を失った古い映画に再び

商業的な価値を与え、その長期的な人気の維持にも貢献してきた」といったアーカイブ側の意見とが、長年にわたって平行線をたどってきた国もある一方で、近年は両者に良好な協力関係——アーカイブが良好なブリブリントエレメントを著作権者／製作会社に提供し、両者共同で復元を行う等——が築かれつつあるのも事実である。それでも「視聴覚メディアに関する海賊行為と闘う会」の代表として登壇したフランス映画界の重鎮が、会場となったシネマテーク・フランセーズの創始者アンリ・ラングロワを批判したのに対して、著名なフィルム・キュレーターが不快感を露わにし、お互いに「あなたには失望した」と言い合う一幕もあり、問題の根深さを際立たせることになった。これについてPACC委員長アンティ・アラネンが、「ラングロワはいくつか間違ったことをしたが、それに倍する良いこともした」と擁護したのは印象的である——“ラングロワ崇拜”に否定的であるFIAFの会議がCFで行われ、権利者との対立の中でFIAFがラングロワを相対的に評価するという構図は、依然として完全には払拭されていない一部アーカイブに対する著作権者側からの不信や無理解とデジタル・アクセスを含む現今の権利問題の複雑さを象徴するようで興味深い。なお、筆者としては、「フェアユース」のような重要な概念をFIAFのような国境を越えるコミュニティが認知していく場合、遵法意識のレベルが国によって相当のばらつきを見せていることは憂慮されるべきであり、その懸念については、むしろ多くの著作権者と同じ地平に立ちやすいとさえ感じている。

2. 映画第二世紀フォーラム——危機に瀕するアフリカの映像遺産

昨年の東京会議において、FIAF70周年記念には「映画第二世紀フォーラム」の枠を使って、アフリカ、特にサヘル諸国以南³の映像保存に関する危機的状況を話し合うことが決定していたが、これは旧アフリカ植民地との深い関係や多くの問題を抱えるヨーロッパ諸国にとっては決して看過できず、しかし一方で、解決の糸口さえ見つからないテーマでもある。きっかけとなったのは、ブルキナファソの首都ワガドゥグにあるシネマテーク・アフリケーヌ(略称CAO、アルディウマ・ソマ所長、運営母体はFESPACO[汎アフリカ映画テレビ祭]⁴)と、そ

の保存センターが、実質上、全く機能しなくなっていることが判明したからである。FIAFとCNCフィルム・アーカイブの全面的な協力を得て、90年代後半から本格的な事業を始めたはずのCAOだったが、現在は、財政、雇用、技術等すべての面で破綻し、フィルムも放置または散逸の状況にあるらしい。フォーラムでは、アフリカ映画史の著者、長年アフリカ問題を研究している専門家、ユネスコ関係者、アフリカからの出席者、ヨーロッパのFIAF加盟アーカイブ代表、名誉会員5人が、真剣な議論を行い、コンゴ、モザンビーク、ギニアビサウ、マリといった他のアフリカ諸国でも状況がほぼ同じであることが報告された。

そんな中で面白い話題と言えるのは、トムソン映画テレビ遺産財団⁶が、現在行っているアーカイブ支援活動をアフリカにも拡大していく計画を表明したことであろうか。また、このフォーラムの議論を受け、最近、フランスのエクレール現像所が、FIAFのアフリカ支援の意思に賛同して、モザンビークの独立と人々の生活を描写した1979年のルイ・グエラ監督作品『ムエダ、記憶、虐殺』(日本未公開)の復元⁷に協力すると発表したことも、ここに記しておいて良いだろう。

3. 総会、上映・展示、記念出版

年次総会では、通常の議題のほかに二つのトピックが加わった。一つは、シンポジウムで議論された「FIAFフェアユース／アクセス宣言」が採択されたこと、もう一つは「FIAF70周年記念manifesto」の原案⁸が示されたことである。

前者についてはすでに述べたので、後者について触れておこう。この文書は、デジタル時代にも、映画フィルムをフィルムとして保存し続けることをFIAFとして確認するという重要な役割を担っており、日豪米英の有志が中心となり、運営委員会や名誉会員、技術委員会の専門家らの協力を得て、昨年秋から準備を進めてきたものである。フィルムは、映画の原素材として貴重であるばかりでなく、100年以上の長期保存ではデジタル・ストレージよりも多くの面で優れ、保存の専門家がケアを怠らない限り比較的安定しており、長期保存コストの点でデジタルよりも圧倒的に安価であり、また、情報の読み出しを機械に依存しない、すなわちヒューマン・アイ・リーダブルであるという点でも安心であり、さらには、デジタル・ドメインにおいて高まる不当な改変の危険性に対しても真正性を担保できるという意味で安全でもある。こうした点を説明する起草グループによるプレゼンテーションには、米・映画芸術科学アカデミー(AMPAS)科学技術審議会の発表した報告書「デジタル・ジレンマ」⁹が、人口に膾炙する

単純なデジタル万能主義に警鐘を鳴らし、映画・映像の長期保存におけるフィルムの有効性を再評価して、このFIAF文書と同じ立場に立つものであることから、AMPASアーカイブの代表も参加した。映画フィルムという優れた「映像原器」を(コンテンツ／キャリア一体として)、今後も守護し続けるための一助となるべく国際共同作業として進められてきたこの試みは賛成多数で原則的な承認を得たが、文面の一部に変更・推敲の必要があるとの少数意見もあり、FIAFとしては、現在、スローガンを含む文言の見直しを行っているところである。

特記しておきたいのは、シネマテーク・フランスが自ら申し出て主会場となり、付帯する各種イベントの開催についても協力を惜しまなかったことである。主催のCNCフィルム・アーカイブ側に、会議・公開イベントに適した自前の会場がなかったことによるが、このような便宜が積極的に図られた一因は、昨年の東京会議の成功でFIAF会議の重要性をCF側が再認識したからだという説がもっぱらであった。CNC、CF間の改善した良好な関係は、サル・アンリ・ラングロワのスクリーン前ステージに両団体の代表が仲良く登壇するいくつかの機会——NFCがコニカラー復元の成果としてプリント提供を行った『赤い陣羽織』(山本薩夫監督、1958年)の上映会など——に端的に表れていた。

また、会議に合わせて、大規模なジョルジュ・メリエス展が開かれ、上映会「ジョルジュ・メリエスのタペ」が行われたこと、東京での写し絵ショーを含むシンポジウム「短命映画規格の保存学的研究」に刺激を受けたこともあって、幻灯ショーが行われ、斯界の権威であるローラン・マノーニが自らマジックランタンのオリジナル・プロジェクターを操作してみせたこと¹⁰、さらに、『プラクシノスコープからセルロイドへ：フランス・アニメーション映画の前半世紀(1892年～1948年)』¹¹(CNC刊、フランス語)『世界のシネマテーク——フィルム・アーカイブの70年』(CNC刊、FIAF協力、仏英西語)『ジョルジュ・メリエス全作品』(CF刊、フランス語)といった記念出版物¹²が刊行されたことも注目すべきところだろう。

4. 結論にかえて

あらゆる点で成功裡に終了したバリ会議は、一方で、フィルム・アーカイブを取り巻く世界の明と暗とを際立たせることにもなった。デジタル・シフトと映画文化の質的变化と国による格差の拡大という潮流の中で、FIAFとその加盟機関は、改めてフィルム・アーカイブ事業の共通するボトムラインとは何かを考えなければならぬ時期に来ていると思う。有り体に言えば、

それはおそらく、(1)フィルムをフィルムとして可能な限り集め、守り続けること、(2)コレクションに対する新旧の多メディア・アクセシビリティを可能な限り高めることの二つに尽きるだろう。

問題はそれを実行していくためのフィルム・アーカイブのかたちだが、この数年、世界中で大きく変化しており、進むべき正解が一つではなくなっていることである。例えば、ノルウェーでは、映画保存のための独立したアーカイブ組織が、国立図書館の一部に組み込まれ、オーストラリアでは、逆に、映画の産業・文化振興機関であるオーストラリア・フィルム・コミッションに一時組み込まれたナショナル・フィルム＆サウンド・アーカイブが、映画と音響の保存に特化した独立した政府の一機関となることが決定した¹³。あるいは、いったんできた「映画メディア部」が、映画部とメディア部にふたたび分かれてしまったニューヨーク近代美術館の例などもある……。

70周年を迎えたFIAFとその加盟会員アーカイブは、強烈な光と影の中にある。 (フィルムセンター主幹)

註

- 1 FIAFでは新会員が順調に増加している一方、過去2年ほどの間に、年会費長期滞納等で少なからぬ会員資格が失効している。今回のバリ会議開催前の時点で事務局から発表された会員数は132で、その内、正会員が83、準会員が49、また、加盟国数は68となっている。地域別では、ヨーロッパが73(国数は32)、アジアが20(16)、北アメリカが16(3)、ラテンアメリカが13(10)、アフリカが6(5)、オセアニア4(2)とされている(地域分類等もFIAF発表による)。
- 2 CNC及びBNFが近年復元した稀少なカラー映画短篇の上映等が、BNFを会場に行われた。
- 3 北アフリカのモロッコや南アフリカ(プレトリア)等のフィルム・アーカイブは、こうした国々のアーカイブに比べれば、まだしも良好な状況にあると言われている。
- 4 シネマテーク・アフリケヌ設立の経緯については、本誌第9号(1996年9-10月号)9頁に詳しい。
- 5 今回の記念会議には、アイリーン・パウザーをはじめとしてFIAF名誉会員が招待されており、その内、映画第二世紀フォーラムにモデレーターとして参加したヴォルフガング・クラウエは、「ヨーロッパのアーカイブには、アフリカと違って何でもありとみんな思っているかも知れないが、ほんの数十年前に自分たちが(東ドイツで)映画保存を始めたころは、本当に椅子も机も何もなかった。そうした状況からみな始めるのだ」と発言した。
- 6 メディア、エンターテインメント、コミュニケーション分野の総合企業であり、テクニカラーを自社ブランド化したことでも知られるトムソン社が2006年4月に設立した財団で、映画遺産を守るアーカイブとその活動に協力している。特に、カンボジアにリティ・バニラのイニシアティブで設立されたボファナ・オーディオビジュアル・リソース・センターやインド国立フィルム・アーカイブへの財政支援が知られている。
<http://www.thomson.net/GlobalEnglish/Corporate/About/thomson-foundation/Pages/default.aspx>
- 7 復元作業はエクレール現像所自身が担当し、来年のFIAFプエノスアイレス会議にてお披露目の予定。協力の費用は25,000ユーロを上限としている。
- 8 素案の詳しい内容については、朝日新聞5月24日夕刊第10面の筆者による記事「映画、フィルムで保存を」を御参照ください。
- 9 本誌第78号(2008年4-5月号)2頁、参照。
- 10 他にCNCフィルム・アーカイブとスタジオ・カナルによって修復された『影の軍隊』(ジャン＝ピエール・メルヴィル監督、1969年)の上映等も行われた。
- 11 こうした出版事業やメリエス展の開催、FIAF会議自体への資金援助を行った企業の一つナティクス(NATIXIS)は、そのメセナ・ポリシーに「昨日の遺物、明日の宝物」を掲げている。
- 12 これらの出版物は、NFC図書室で近々公開予定。
- 13 正式な独立は2008年7月1日。